

昭和五十八年六月二十二日 〓講演

「国際情勢の展望と日本の立場」

慶応義塾大学教授 神谷不二先生

〓紹介をいただきました神谷不二でございます。先回お邪魔をいたしましたのが、しばらく間が空いていて、六、七年か、七、八年か前であったと覚えています。したがって諸君にお目にかかりますのは、今日が初めてということですから、この和敬塾の存在にしましては、かねて私、その存在を大変高く評価する、というといささか僭越な言い方でありませうけれども、大いに注目すべき存在である。特に最近、若い人がある一つの哲学とか信条というものを中心にして起居を共にすると、そういうのはどうも時代遅れであるといったような風潮がございます。したがってしばらく前には、「なんとなく、何とか(※なんとなく、クリスタル)」という小説が大いに流行ったり、「何となく」というのがムードになっていまして、そういう中で何となく、ではなくて、一つの和敬塾の信念、信条、哲学というものを中心にして団体生活をなさっている。これは今日の世の中において、大変得がたい経験を諸君がなさっていることである。

またそういう場を提供しておられます和敬塾というものについて、私がかねてから大いに敬意を払って、今日に至っているわけでありませう。本当はもう少し前にまた一度お邪魔しようということでお誘いをいただいたんですけれど、私のほうの都合でしばらく先にしてくださいというふうにお願ひして、それがしかし、今回はからずとも実現をいたしまして、遅ればせではございますけれども、二度目としてお邪魔をする機会を得ました。またこれからもせめて数年に一回はぜひひ参上して、若い諸君、あるいはその諸君の後輩と、ずっと〓交際を願いたいというふうに思っています。

さて今日、私が頂戴していますテーマは、今日及び予見し得る将来における国際情勢の展望、そしてそういった国際情勢のもとにおける日本のあり方について、一度一緒に考えてみようということでありませう。時間も限られていませうので、前置きらしきことを省いて申しますならば、何といつても今日の世界で、いろいろな

トラブルとか不安定とか問題の源になっている国といえはいろいろございますけれども、やはり私はソ連という国を挙げなければいけません。壇上に出てまいりまして、とんにソ連はトラブルメーカーであるというようなことを言いますと、いかにも反ソ的な宣伝をするためにお邪魔したようにお思いの方もいらつしやろうかと思ひますけれども、決してそうではないのでありまして、私はこれでもかなりソ連という国に対して客観的に理解ある態度をとっている人間の一人だと思ひます。

それが証拠に毎年十一月の革命記念日になりますと、ちゃんとソ連の大使館から招待状がまいります。彼らが、私が物事を故意に曲げてソ連を悪し様に言うような人であるというふうには本当に思っているならば、よもや毎年、革命記念日に招待状はくれないと思ひますけれども、ずーっときています。一見、ソ連に非常に好意的であるかのごとき左翼の人たちは、あ

るときには招待状がくるけれども、あるときには招待状がこない。きたりこなかったりということ、かえってそのことを気にしていますけれども、私はソ連に対していつも、少なくとも言いたいことは何でも言う、言わなければいけないと思うことは何でも言うことにしていますけれども、にもかかわらず必ず毎年招待状がきているということは、少々私がソ連のことを悪し様に言うといたしましても、それは決して根も葉もないことで、ためにする反ソ宣伝をやっているということではなくて、それなりの根拠をもってやっているということを、彼らも認めざるを得ない。だからそういう態度に出ているのだと、私は勝手に自分でそう思っています。そういうわけですから、決して私は根拠のないことで、ソ連を単に悪し様に言うことを好むものではないと、客観的に見まして、公平な立場から言つて、どうもソ連というのはいささか困った存在であるというふうに言わざるを得ない。昨日、日立か何かの系列会社から先端技術を取ろうとしたKGBを国外追放したという発表があり、今朝のある新聞を見てみますと、今年になってから世界の各国で、ソ連人、ロシア人を追放したケースがずーつと書き立てられています。ソ連の当局に言わせれば、こんなのはでつち上げだとかうそだとか、いろ

いろ言っていますけれども、どう考えてもちゃんとした文明国が、れっきとした証拠を挙げて国外追放をする——先般、フランスのごときは一挙に四十七人出て行けとやったわけでありますけれども、そういうれっきとした文明国がソ連人、ロシア人の追放をしている。その数が今年になってからでも五回や十回ではないということ、どう考えても異様であります。そういう扱いを受けまして、ソ連は時に報復的な意味で、それじゃイギリス人も出て行けとか、ドイツ人も出て行けというふうにやっていますけれども、そういった西側の先進国などは、時にそういうことはありまして、半年の間に五回も十回もそんなケースがリストアップされるということは、ちよつと常識で考えられない。ところが、そういう常識で考えられないようなことが、ソ連については現に起きています。大変長つたらしいリストアップがなされていて、それ一つを取ってみても、どうもソ連という国は、最も好意的に解釈するとしても、トラブルをいろいろな場所につくろうとしている。あるいは結果的につくってしまう国だということだけは認めざるを得ないと考えますので、しばらくはソ連を中心にしてお話を進めてまいりたいと思います。

そこをソ連を中心にしてということになれば、今日の世界で一番問題になっています、大きく言えば世界の将来を左右するような問題ということになれば、恐らくお気付きの方も多いかと思いますけれども、ヨーロッパの中距離核戦略（INF）をめぐる米ソ・東西の話合いです。このヨーロッパ、INFをめぐる米ソ・東西の話合いが一两年前から世界の一つの大きな焦点になっていまして、ご記憶の方、ご承知の方も多いかと思えますけれども、このヨーロッパ中距離核ミサイルのことが大変大きな問題になりましたのは、数年前からソ連が——これも改めて黒板に書く必要などないと思えますけれども、「SS 20」と称する新型の大変性能のいい核ミサイルを開発し、それをどんなに配備しまして、SS 20が今や全ヨーロッパをその射程距離の中に置いてにらみを据えている。これに対して、西側、NATOの側にはSS 20に対抗すべき性能のいい中距離核ミサイルがない。なんとかしなければいけないと、こういうところから問題が始まったわけであります。

考えてみますと、ソ連も一方的にこういうことをやって、ますますトラブルメーカーになっているわけですが、反面アメリカも少したるんでいるという感じがするわけであります。といいますのは、大体アメリカはソ連との関係におきまして、とりわけ核の関係におきまして、少なくとも量的にはソ連に劣るかもしれ

ないけれども、質の面では断然ソ連を抑えている。したがって質的な優越がある限りは、アメリカは少なくともソ連と対等、ないしはそれ以上の立場にずーっと立っていくことができるんだと、こういうことで長年アメリカはやってきたわけであります。現に中距離核ミサイルのもう一つ上のレベルといえば、戦略核のレベルになるわけです。戦略核のレベルを見ますと、今日はその問題が中心ではありませんから、それに深く立ち入りませんが、戦略核ミサイルということになれば、代表的な核ミサイルはICBMと略称される大陸間弾道ミサイルと、SLBMと略称される潜水艦搭載のミサイルであります。

ICBM、SLBMについて言いますならば、今日、ミサイルの発射台の数で申しますと、アメリカのおおむね四割増しぐらいの数をソ連が持っているわけであります。これは今から十五年、二十年前にはそんなことではなくて、量の面でもアメリカのほうが圧倒的にソ連を抑えていたわけであります。ソ連の指導者の名前では、去年の秋に亡くなりましたブレジネフ、彼がソ連を十八年間抑えていたわけでありますけれども、このブレジネフ十八年間のソ連にとつての最大の業績、ブレジネフが挙げた最大の成果は何であるかといえば、そういう核ミサイルの面で、量においても質においてもアメ

リカに圧倒的に遅れをとっていたソ連の戦略核戦力を、アメリカと少なくとも対等のところまで引っ張り上げた。ですから、これはソ連の立場からすれば大変大きな成果であります。

考えてみればブレジネフという人は非常に幸せな政治家でありまして、十八年かかって、そういうソ連の核の劣勢をアメリカと対等のところまで引き上げた。これはソ連にとつては大変大きな業績であります。しかしそこまでやるからには、どんどん無理にカネをつぎ込んでいくという面もありますから、したがって経済の面から言えば、そろそろそのツケを払わなければならぬという段階に、八〇年代になってソ連は差し掛かってきた。しかしそのツケの支払いに困ってどうしたらいいか分からないというような、そういう苦しい状況になる前に、彼はツケの支払いはアンドロポフに任せて、自分はお先に失礼してしまつた。ですから後に残つたのは、ブレジネフというのはこういう大きい業績を挙げたと、それだけ残りまして、ツケの支払いのほうの負担を免れることができたという点で、大変ラッキーな政治家であつたと私は思っています。

話を戻しまして、このブレジネフがやりましたことは、まず、量的にも非常に劣勢であつたソ連の核をどんどん増やした。ですからこの資料ではちよつと見にくい線ですけれども、白の

横イチの線は、アメリカのICBMとかSLBMの数であります。ここの十六、七年、ほとんどといていくくらい増えていません。それに対してソ連の赤いほうの線は、今から十五年、二十年前にはうんとアメリカよりも下のほうにあつたのですけれども、どんどん数を増やしてまいりまして、アメリカとほぼ同じ数を持つようになりましたのが、今から約十年前です。七〇年代の初めにアメリカと肩を並べまして、そしてその後もソ連はどんどん増やして、今日、大づかみに言つてICBMもSLBMもアメリカの四割増しというところに来ていくわけであります。しかしアメリカのほうには、少々数の面ではソ連に遅れをとつたとしても、それを補つて余りある質的な優越があるということで、少なくとも最近までは数を増やさないままに、これで十分ソ連に対抗できるという立場をとつていたわけであります。

戦略核でそういうことをやっていたら、中距離核でも同じような程度のことをやっていけば、こんなに今日、やれSS20だ、INFだと騒ぐことはなかつたと思うのですけれども、どうもアメリカは戦略核のほうの力に少し頼りすぎた。言葉を換えて言えば、中距離核ミサイルのほうを軽んじていた気味がありまして、知らず知らずの間に遅れをとつてしまつて、ソ連がSS20でにらみをきかしたその段階で、アメ

リカはどうもいい対抗手段がないということになってしまった。これが、つまりアメリカは少したるんでいたのではないかと言いたいところがあります。

しかしそれはともかくとしまして、そういうことではいけないということで、NATOが一九七九年十二月——ちょうど七九年十二月といいますが、ご記憶のように年末ぎりぎりのところでソ連がアフガニスタンに攻め入ります。ソ連のアフガニスタン侵攻が行われました。ちよつと前に、NATOで重要な決定が行われていました。その決定はどういうものであるかというならば、近く行われるヨーロッパINFに関するアメリカとソ連の交渉、この交渉が一九八三年いっばいにまとまれば、それでよろしい、大いにまとめるように努力をしてみたい。しかし、もし不幸にして八三年の末までに米ソの交渉がまとまらないときには、八三年の末から西ヨーロッパ諸国にSS20に対抗すべきアメリカの新型ミサイルを配備するという決定をNATOがした。それが七九年の十二月のこととあります。その段階ではまだ一九八三年までには三年以上あると、ある程度樂觀視する向きもあつたんですけれども、予定されておりました八三年というのが、今やもう八三年の半ばを過ぎるところまでできています。あと半年の間に米ソの話し合いなるものが本当にまと

まるのかどうか。これは一九八一年以来、ジュネーブでのヨーロッパINFをめぐる米ソの話し合いがずつと行われていますが、それが果たしてまとまるかどうかと、今ぎりぎりのところに来ていますけれども、どうも専門家の見るところでは——私もその専門家の一人に勘定させてほしいのですけれども——とても今年の末までにアメリカとソ連との話し合いがつくとは思えない。

さてそういうことになれば、残されました問題は、かねてのNATOの決定どおり、今年末からアメリカの新型ミサイルの西ヨーロッパ配備を予定どおり始めることができるかどうかという問題であります。ちよつと細かいこととすけれども、念のためアメリカの新型ミサイルなるものの名前を、これもご案内の方が多いかと思えますけれども、書いておきます。

一つは上に書きました「パーシングII型」というのがそれでありまして、もう一つは下に書きました「クルーズミサイル」、普通日本語で巡航ミサイルと言っています。このパーシングII型と、それから陸上発射の巡航ミサイル、この二つの配備を、今年からアメリカはNATO加盟の西ヨーロッパ諸国に開始をするというのがかねての決定でありますけれども、ソ連は言うまでもないことですが、こゝに、二年来、なんとかして現状どおりで事態を推移させよう

というふうに思っています。それは現状どおりでいけば、ソ連にはSS20がある、NATOの側にはそれに対抗するような戦力はないということですから、ソ連が現状維持を望むことは当然であります。そこでソ連は米ソの話し合いはまとめない。同時に八三年の末から始められる予定のアメリカのパーシングIIとクルーズミサイルの西ヨーロッパ配備も、なんとかして阻止しよう。つまり一昨年从去年、今年もやっていますけれども、反核運動なるもののねらいは、主にはそこにあるわけでありまして、反核運動でもってアメリカとヨーロッパ、それからヨーロッパでも運動をやっている人と政府、そういう間に大きな亀裂が生じまして、予定どおりアメリカの核ミサイル配備を始めようといったつて始まらないということになれば、ソ連のほうは思うつばでありますから、そこで反核運動にしろ何にしろ、ソ連は、アメリカとヨーロッパをいかに割るか、アメリカと日本をいかに割るか。要するに西側の足並みをそろえさせないよういろいろな工夫をしていると、こういうことになります。

ついでですが、後からその問題にもう一度触れますけれども、最近、アメリカのウイリアムズバーグで行われましたサミットで、アメリカ、西ヨーロッパ、そして日本もそれに加わって、かねてNATOの決定どおり、今年末からア

アメリカの新型ミサイル配備を始めるという立場を再確認したのは、極めて当然のことでもあります。一部の新聞等はいいますか、相当部分の日本の新聞等は、それに文句をつけまして、日本はNATOの戦略体制に組み込まれたというような口実のもとに批判や非難を行っていますけれども、私はそういう非難は当たらないと思っております。もしソ連が望んでいるように核ミサイルの配備が予定どおり始まらないということになれば、結局のところニンマリするのはソ連だけでありまして、困るのは我々西側であります。したがって中曽根さんにしまして、ウイリアムズバーグへ行きまして、NATOの決定に賛成であるということを言うのは極めて当然のことでありまして、もし中曽根さんがそういうことも言わないで黙っている、INFの問題はヨーロッパとアメリカの問題だ、日本は関係がないというようなことで横を向いているとすれば、逆に私は、そういうのは日本の総理としては怠慢であるということで大いに非難の鼓を鳴らしたところでありまして、さすがにそういうことはしなかった。大変結構なことではないかと思っております。

もう一つ、INFの問題は、今も言いましたように決して対岸の火災ではございません。ヨーロッパだけの問題ではないのでありまして、既に東アジアにもソ連のSS20が百八とか百

七とか言われていますけれども、それだけ配備されているわけでありまして。それだけでも、実は我々、大いに頭を悩ませざるを得ないところへもつてまいりまして、数カ月前からヨーロッパINFの交渉がいろいろ行われています。程で、ソ連から西ヨーロッパのある国に対して、一つの可能性として、今ヨーロッパのほうに向いている、そのSS20を相当部分東アジアに移すと、そういう形でヨーロッパのINF問題を妥協的に解決するという案を出したりしています。二百五十ぐらいある、今の西ヨーロッパ向けのINFが、例えば半分になれば、それは西ヨーロッパにしてみればソ連と大変妥協しやすいわけでありまして。しかし半分ぐらいに減らした百幾つ分をそっくり東アジアに持つてくる、中国とか日本向けに配置するということであれば、これは我々としては非常に困るわけです。したがって半年ぐらい前から日本はアメリカに対して、SS20の問題はヨーロッパだけ切り離して考えてもらっては困りますよ。SS20の問題は、ヨーロッパもアジアもひっくりかえってグローバルに、全世界的な問題として考えてもらわなければ困りますよということ、何度も申し入れていきます。アメリカは「イエス、日本の立場は分かりました」と言っているのですけれども、だんだん期限がせまつてまいりますと、そんなきれいな事はいくかどう

か分からないわけでありまして。ヨーロッパあたりでは、日本がどうなるかと、とにかくヨーロッパ向けの筒先がアジアのほうに向けば、それでいいじゃないか。特に経済の問題、貿易の問題などでは、日本の野郎、何だというふうに、日本に対して大変不満や怒りを持つているヨーロッパ人は多いわけでありまして。だから、そういう人にしてみれば、いい気味だと言わんばかりに、西ヨーロッパ向けのSS20を東アジアに移すことによつて、問題を妥協的に解決するという案を未だに出そうとしている向きがあるわけでありまして。したがってそういうことに対しても、改めてサミットの席で、そういうのは困りますよ、ということを行う必要がある。この前ウイリアムズバーグでは、日本の総理大臣はその点にもはっきり触れまして、SS20の問題、INFの問題はグローバルな、世界的な基礎で解決を図るということについて、各国の一札をちゃんと取ったわけでありまして、そういう意味でもこの前の声明は、私は大変な意味があると見ているわけでありまして。

さて、もう少しヨーロッパINFの問題にこだわっていききたいと思いますが、ヨーロッパINFの問題をめぐる米ソの立場は、ここいらあたりは改めて詳しく説明申し上げるまでもなくご存じでしょう。かねてアメリカのほうは、いわゆるゼロオプション、つまりソ連

もSS 20を全部廃棄しろ、そうすればアメリカもパーシングIIとクルーズミサイルの配備は一切しないという、米ソ双方ともにゼロにするという、このゼロオプションということをして、ガンは言ってきた。それに対してブレジネフは、現状凍結、モラトリアムということをやったわけであり、ブレジネフからアンドロポフに替わりまして、少しは修正案、若干ソ連が今まで以上に譲歩したような提案が出ていますけれども、大づかみに見ますところでは、今日のアンドロポフの提案も、ブレジネフ時代の提案とまだまだそんなに変わっていないわけであり、幾つかの問題点があります。

例えば米ソの中距離核を比較するのではなくて、ソ連に言わせれば、アメリカ以外にNATOにはフランスのミサイルもあれば、イギリスのミサイルもある。英仏のミサイルの数を勘定に入れるというようなことを言ったりしています。いずれにしても、目下のところでは、ソ連がそれほど大きく譲歩してくる見込みはございません。まだまだソ連は、ひよつとしたら、うまくいけばアメリカと西ヨーロッパが割れて、ミサイル配備が予定どおりできないという事態もあり得ないではないというふうな、つい最近まで考えていたと思います。少なくともつい最近まで考えていたのを、どうやら望み薄にしたのは、最近の西側に起きました一

連の出来事であり、

まず、三月に西ドイツで総選挙が行われました。この三月の西ドイツの総選挙では、去年の秋から出てまいりましたキリスト教民主同盟のコール首相、つまり保守派の勢力が勝つか、それとも社会民主党、とりわけ左派とか、それから最近ではドイツでグリーン、緑の党というのが出てまいりまして、日本でも最近それをサル真似して、日本緑の党などというのを名乗っているのがいます。けれども、誠にどうかと思うんです。その本家のグリーン、社会民主派の左派とかグリーン、ネンなどがどこまで国民にアピールするか。もし三月の選挙でキリスト教民主同盟——新聞はこれをロケット党と呼んでいましたが、このロケット党が勝てば、これはアメリカのミサイルを受け入れるということをはっきり言っている党ですから、それはそれでいいのですけれども、もし今のグリーン、ネンとか社会民主派の左派が勝てば、これは新聞では中立党という呼び方をしていますけれども、とにかくアメリカの核ミサイル配備は受け入れないということを言っているわけですから、そこで従来どおりロケット党が多数を制するか、それとも中立党が多数を制するかというところで、大いに三月の西ドイツの選挙は世界の注目をあびたわけであり、つまり、よその結果は誠に巧妙でありまして、つまり、よ

ほどまい演出家がいってやったとしても、こんなにいい結果は出ないというくらい、いい結果が出たのであります。どうして私とその結果をそんなに褒めるかといいますと、アメリカの核ミサイルを受け入れることをはっきりさせています、キリスト教民主同盟が、予想以上の大きな勝利を収めたという、これが第一点であります。

しかしもう一つは、グリーン、ネンという新しい勢力が、この選挙の結果初めてドイツの国会に議席を占めたということがあります。今、二十七、八人、グリーン、ネンの連中が——連中と言つては失礼かもしれませんが、ドイツの国会にいまして、私もこの四月にヨーロッパに行きましたときに、その人たちの代表と会つてまいりました。今までドイツの国会にいた人にしてみれば、随分目障りな存在でありまして、ネクタイもしなければ、ジーパンにジャンパー、頭もモサモサというようなのが、のし歩いているわけですから、それも二、三人ではなくて二十何人、大変気にする向きもあつたのですけれども、私はそういうグリーン、ネンの言っていることには全く不賛成ですが、しかし、グリーン、ネンに議席を与えたというドイツ国民の選択には、大いなる敬意を表したいと思つています。つまりドイツの選挙では、政治学の復習みたいで恐縮ですが、今度の日本の参議院全国

区選挙に見られますような比例代表制をとっています。しかしその比例代表制の下に足切りがございまして、得票率5%を下回る政党、政派は議席を取れない。議席数ゼロです。ですからグリーンが議席を占めるかどうかということは、グリーンが5%を上回るかどうかという、それによつて決まることになつていたわけですけれども、ドイツの選挙民は5%を上回る得票をグリーンに与えたわけであり、構扱いにくいところもございまして、もう既に扱いかねているような場面もないのでないのですけれども、もしそういう勢力を国会に一切入れないという扱いにしてしまふと、アングラ活動で、それこそときどき成田の空港で、何とか派というのが妙な行動に出る。ああいうアングラ活動を次から次にやるということに追いやつてしまふわけでありまして、そうではなくて、ちゃんと国会に議席をあなた方にも与えているのだ、主義、主張があるのならばここでやれというような調子でやれば、彼らはおのずからドイツの民主主義政治体制の枠組みの中に入つてくるわけでありまして、したがつて、そういうふうには持つていったということ、そして全体としては、保守派に予想以上の大きな勝利を与えた。ですから、これはちよつとで済むべきなからというまい結果が出たものだ、ドイツ国民

の政治的な成熟に、私は大変強い印象を受けたわけでありまして。

もう一つ、最近の西ヨーロッパで大変大きな選挙が行われました。これは新しいことですからご記憶の方も多いと思ひますけれども、今月の初めにイギリスで行われました総選挙で、サッチャーの保守党が近來にない大勝利を収めた。近來にない大勝利といひまして、得票数で言えば、実際はそんなに大勝利ではないんです。野党と与党との議席の差が百四十四議席とこのわけです、ちよつとない大勝利ですけれども、得票率で言えば、サッチャー保守党が得た得票率はわずか四二%。あとは伝統的な野党である労働党と新しい第三勢力である社会民主党と自由党の連合勢力。この労働党と中道勢力との二派合計でもつて、実は得票率で言えば五六%。あと二%は無効票とか白票です。むしろ得票率で言えば四二対五六で、野党のほうが優勢なんですけれども、イギリスの小選挙区、一選挙区当選者一人という仕組みから言ひますと、その四二%のサッチャー保守党が、なんと近來まれに見る大勝利を収めたということでありまして、これも、言うまでもなくサッチャーの保守党はNATOの決定どおりに米ソの話し合いがまとまらなければ、今年の末からイギリスも、アメリカの新型核ミサイルの受け入れを始めるという立場をはつきりつけていま

す。野党の、少なくとも労働党のほうは、日本の社会党と同じように反核一本やりでありまして、アメリカの核ミサイルは受け入れないという態度で選挙に臨んだわけですけれども、労働党は大変大きく落ち込みまして、どうやら第二党の地位は確保したんですけれども、得票率で言ひますと、あまり社会民主党及び自由党の連合勢力と差がない。せいぜい二、三%の差というところまで追い込まれてしまつた。それでイギリスでも圧倒的な国民の多数は、ミサイルの受け入れ賛成の態度をとつたわけでありまして。

ドイツとイギリスでそういう態度が表明されれば、これは単にドイツ、イギリスの問題ではなくて、西ヨーロッパ全体の問題でありまして、つまり西ヨーロッパ全体が米ソの話し合いがまとまらなければ、再三繰り返して恐縮ですが、二つのミサイルを配備開始するといふ態度をも改めて確認したのであります。それをいわば今度のウイリアムズバーグで、もう一回別の角度から再確認したということでありまして、しかもウイリアムズバーグの会議には保守党ではないフランスのミッテラン社共連立内閣なども入つてゐる。そういうミッテランの社共連立内閣も、ことヨーロッパの防衛とか安全保障という問題になりますと、大変なタカ派でありまして、ソ連のSS 20に対抗するためには、

ヨーロッパは核を持たなければいけないという点は、ミッテランもコールもサッチャーもそんなに変わらない。ただ、フランスはああいう国ですから、あくまでも我を通しまして、「ただし、我々はNATOという枠組みで一緒にやるといふことはしない。フランスはあくまでもフランスの独自の核でやります」ということで、いさかか衝突しているところがややおかしいんですけれども、西ヨーロッパの足並みを乱すようなことは、そんなわけでフランスといえどもやっていないわけでありませぬ。

日本で来週の結果、どういふ結果が出るか分かりませんが、もしもおおむねこれまでのように参議院においても、日本の保守党が優越的な地位を占めるという状態がもう一回再確認されるとすれば、西側全体について言うならば、今年になってからドイツもイギリスも日本も、皆ちゃんと選挙をやつて、選挙の結果、足並みがそろつたということであれば、これは大変大きな圧力をソ連にかけることになる。今や世界は——私はこれをタカ派ないしは保守派四人組と呼んでいるんですけれども——レーガン、サッチャー、コール、中曽根と、このタカ派、保守派四人組でもつてがっちり取り仕切つていこうと、こういう体制がはつきりするわけでありませぬ。

ところで、タカ派四人組などをいかにも褒め

るようなことを言いますと、中には首をかじげる人がないでもない。それはどうしてかと申しますと、日本ではとかくタカ派というのは悪玉で、ハト派というのは善玉であるというムードが、とりわけインテリとかマスコミというところからあるように思うんです。あるいはアメリカの政党について言いますならば、概して言えば民主党がハト派であります。共和党がタカ派であります。日本のインテリとかマスコミはどうも民主党が好きで、ケネディ大統領などというところとみんな拍手をしたくなる。レーガン大統領などになりますと、出てきてからよく言われたことは一度もない。

しかし、ここらあたりは、すこし偏見がありすぎるのではないかと、私はあえて言いたいわけでありませぬ。アメリカの歴史、過去数十年間を見てみましても、本当に日本のマスコミが言うように、日本の相当数のインテリがそう信じているように、ハト派・民主党はリベラルで、そして平和勢力。タカ派・保守党はコンサーバティブで、戦争勢力といいますが、本当にそうでしょうか。私は、少なくとも歴史が示すところは、むしろそれとは逆のことを示していると思つています。

一九四〇年代に、我々年配前後の者以上は大いに苦しんだわけでありませぬけれども、大東亜戦争、第二次世界大戦を戦つたわけでありませぬ。

この第二次世界大戦を戦つたのは、アメリカの民主党の代表、ハト派の代表とも言うべきフランクリン・ルーズベルトです。これが一九四〇年代。約十年たちまして、一九五〇年代、第二次大戦後にアメリカが大きな戦争をまた戦つた。それが五〇年代前半の朝鮮戦争ですが、この朝鮮戦争を戦つたアメリカの大統領は、ルーズベルトの後継者、民主党のトルーマン大統領であります。これもアメリカの枠組みで分けて言えば、タカではなくてハトに属する人でありませぬ。そのトルーマン大統領のもとでアメリカは朝鮮戦争を戦つた。更に一九六〇年代の後半になりますと、アメリカは再びベトナム戦争を戦います。ベトナム戦争は長く続きましたから、いろいろ大統領のもとでアメリカはやつていますけれども、本当にベトナム戦争をアメリカの戦争として大規模に戦うことにしたのは、民主党のケネディ大統領であり、その後継者であるジョンソン大統領であります。ですから四〇年代、五〇年代、六〇年代、みんなアメリカは民主党の大統領のもとで、タカとハトに分けて言えば、ハト派の大統領のもとで戦争をやつていくわけですね。

共和党は何をしたかと言えば、五〇年代ではアイゼンハワーが出てきて、朝鮮戦争に待たされた。六〇年代の末からですが、七〇年代になりますとニクソンが出てまいりまして、ベ

トナム戦争を終わらせる。ニクソンにしたって、これはタカ派中のタカ派。キッシンジャーにしたってれっきとしたタカ派でありますけれども、このタカ派が戦争をやろうというのではなくて、戦争を終わらせようということを出てきて、現に戦争を終わらせているわけでありまして。そうしますと、少なくとも過去数十年間のアメリカの歴史に関する限りは、戦争をやったのはハト派であるはずの民主党の大統領、戦争を止めたのはタカ派の共和党の大統領というのは、これは意見の問題ではなくて事実の問題ですから、誰も否定することはできない。ことほどさように、ハト派は平和勢力である、タカ派は戦争勢力であるというふうには、最初から決まっていた、だからタカ派は危険だ、危なっかしいという、そういう単純なことを言っているようでは、とてもじゃないけれども、はつきりとした国際情勢の認識などはできないと、私はあえて申し上げたいわけでありまして。

歴史的に見ましても、ちよつと古い話ですけど、十九世紀の七〇年代、八〇年代、一八七〇年代、八〇年代のヨーロッパを見てみますと、これは一言で言えばビスマルクの時代であります。このビスマルクというのは、ニクネームがアイゼン・ウント・ブルート、「鉄と血」というのがニクネーム。鉄は言うまでもなく武器を意味しますし、血というのは言うまでもなく兵隊を意味するわけでありまして、そういうアイゼンとブルートという、アイアンとステールという、そういう物騒なニクネームが付いたくらいはタカ派中のタカ派、これがドイツのビスマルクであったわけですけども、そのビスマルクが実際に展開した政策は何であるかと言えば、人呼んでフリーデンス・ポリテイクとか、あるいはヒヤアジツフェルングス・ポリテイク、つまり平和政策とか安全保障政策という名で呼んでいる。現にビスマルクがいまして七〇年代、八〇年代の二十年間というのは、ヨーロッパはまれにみる平和をエンジョイした二十年間であつたわけでありまして。ビスマルクがドイツの政界から消えますと、とたんにヨーロッパの情勢が悪くなつてまいりまして、やがて第一次世界大戦ということになつていく。つまりヨーロッパの平和を二十年間にわたつて守つたのは、タカ派のビスマルクである。これも一つの歴史的な事実であります。ですからそういうふうに見てきますと、どうも日本のインテリというのがハト派に甘い、民主党に甘い。タカ派にからくて共和党に偏見を持っている。これは事実であり、またそういう偏見はこの際解消して、もつと事態をありのままに眺めなければいけないと思ひます。あえて申しますならば、私は、タカ派は何でもいいなどということをお願いするつもりはないんです。

しかし、タカ派は悪いというふうには頭から決めてかかるのは大変よくない、ということをお願いするのであります。そんなわけでレーガンという人を、私はそれほどアメリカの歴代大統領の中でも高く評価するということではありませんが、日本の多分に偏見の勝つた新聞が言うほど、レーガンというのは危険な、物騒な勢力であるというふうには、決して思つていません。そういう人たちに言わせれば、レーガンというのは何かしよつちゆう戦争のことばかり考えている。今や中曽根がそれについて行こうとしている。危ない、きな臭い。そんなことはないのです。確かにレーガンは大統領選挙を戦つてるときから「ストロング・アメリカ」と、強いアメリカをつくることをスローガンに掲げて出てまいりました。しかし、レーガンは「ストロング・アメリカ」をスローガンに掲げ、そしてソ連に対する政策では、まずアメリカ及び西側の軍事を再強化するという政策をとつていますけれども、決して再軍備、軍備増強のために、それを目的にして軍備増強をやっているのではないということも、我々は理解する必要があります。と思うのです。もしレーガンが軍備増強だけが目標で、究極的にそれを目標にして軍備増強をやっているというならば、確かに危険な要素があるというふうには言わなければなりません。け

れども、私の見るところではそうではなくて、レーガンが目標にしていますのも、究極的にはソ連との間にどういふ対話を積み重ね、その結果どういふ妥協、これから八〇年代の半ばから末に向けての、そういう将来に向けての、どういふ効果的な合意をソ連との間に取り付けるか。つまり、ソ連との新たな合意を取り付けるということがレーガンの場合も目標であります。ただし、そういう新たな合意、新たな妥協を可能にするためには、アメリカないし西側はもう少し軍事力を強化しなければいけないという判断のもとにレーガンは軍備増強をやっているのでありまして、決して軍備増強のための軍備増強をしているというほど単細胞的ではないと見ています。

つまり、今日の西側にとつての課題は、このINFなども正にそうでありますけれども、ソ連がなかなか譲歩をしない。譲歩をしないままに妥協をするわけにはまいりませんから、したがって、せめてもう一段ソ連を譲歩させる、そういう新しいテーブルにつけるためには、今年末からアメリカの新型ミサイル配備を始めなければいけない。もし今年末になってもミサイル配備ができないという状態がヨーロッパに出てまいりますならば、ソ連はそれこそ、とことんこれ以上譲歩をする必要はない、頑張ればアメリカとヨーロッパは必ず割れると思

うに違わないのであります。現に過去一年、二年、ずっと見てまいりますと、ヨーロッパとアメリカはどうも調子が悪い。日本とアメリカ、日本とヨーロッパも、経済の問題、その他でもって随分対立しておりますけれども、特にうまくいっていないのはアメリカとヨーロッパの関係であります。レーガンがソ連に対して経済制裁をやるうと言ふ。西ヨーロッパのほうは経済制裁などには参加できないというようなことを言う。典型的な例で言えば、ヤンブルグの天然ガスのパイプラインの問題というのが、一時、随分議論されました。つまり、西部シベリアのガス田から西ヨーロッパに直接パイプラインを引くという。これは新聞で読みますと二、三行で話が済む天然ガスパイプライン問題ですけれども、これは随分でかい話なんです。あのソ連のガス田から西ヨーロッパまで引いてくるパイプラインの距離というのは、五千何百キロ。五千何百キロといいますが、直線で東京から南に線を引きますと、バンコクの向うに行くんです。アメリカ大陸で横に線を引きますと、ワシントン、ニューヨークからサンフランシスコ、ロスアンゼルスを越えて海の中に入るくらいの距離であります。

そういう五千何百キロというような大変な距離をパイプラインで結んで、天然ガスを直接ソ連から西ヨーロッパに供給しようというの

です。そこでアメリカは、こんなに大掛りなことをやられたんでは、もう西ヨーロッパのソ連に対する依存率が飛躍的に高まる。少なくとも天然ガスについては飛躍的に高まる。アメリカの計算では、もしそのパイプラインが完全に完成すれば、西ヨーロッパが消費する天然ガスの四分の一近くはソ連に依存するという事態が生ずる。そういう計算のもとに、そこまで依存率を高めたならば、いざというときにソ連に対して西ヨーロッパが強い態度が取れるであろうか。どうもそれは期待できないということになれば、世に言う、これがフィンランド化ということ、フィンランドイゼーションということでありまして、フットノートを一つ付けますならば、フィンランドイゼーションという言葉はあまり乱用しないほうがよろしいと思います。たしか日本の総理大臣だったか、外務大臣だったかも、最近フィンランドみたいだというようなことを言つて、フィンランドの大使館からねじ込まれていまして、確かに、私もヘルシンキへ二度行ったことがありますけれども、ヘルシンキに行つて先方の話を外務大臣その他からいろいろ聞いていますと、彼らは彼らなりに条件が悪いけれども、ソ連に対して自主性をいかにして保つかという努力を非常にやつていまして、ああいうのを見ますと、そう軽々にフィンランドイゼーションというような言葉を使

うのは、確かによくないという気持ちになるわけでありませう。

しかし、もう少し大きな立場から見れば、経済的その他の依存率が一定以上に高まったために、こころ一番というときにソ連に対する強い態度が取れないというのがフィンランド化といふことの意味だと思えば、アメリカがこの問題について正に心配したのは、西ヨーロッパ全体のフィンランドイゼーションといふことを心配した。しかし西ヨーロッパに言わせれば、だからと言って、域内に油なりガスなり、それほどたくさん生産するわけではない西ヨーロッパのエネルギー問題といふのを一体どうしてくれるか。アメリカから大西洋を越えて、直接パイプラインでも引つ張つてやつてくれるというならば、アメリカのほうに乗り換えてもいいけれども、そうはいくまい。

もう一つは、西ヨーロッパの経済、今、非常に大変ですから、千何百万という失業者がある。そうしますと、パイプラインを引く作業に大変な労働力が吸収されるわけですから、西ヨーロッパの人たちは、むしろ引いた後の結果よりは、引く作業の過程で西ヨーロッパの労働力が随分いろいろな意味で吸収されることを期待しているわけです。ですからレーガンがいくら対ソ制裁と言つても、いや、制裁はいいけれども、パイプラインはちよつと困る。それや

これやで随分こころ二、二年間、アメリカとヨーロッパの間にはいざこざがありまして、一部アメリカの強硬派の中には、なんだ、NATOを一体何のためにやつているんだ、誰が主にNATOのカネを払っているのか、主にはアメリカじゃないか、アメリカがこれだけ苦勞をしてNATOの枠組みを維持しているのに、その枠組みにおんぶされたままで、一方では西ヨーロッパ諸国は経済問題その他で勝手なことばかり言っている、もう我慢できないということ、去年あたりは、もちろんこれは少数派ですけれども、アメリカの一部にNATO無用論というのさえ出たことがある。それくらいヨーロッパとアメリカの関係は良くなかつたわけでありませう。

私はアメリカとヨーロッパの仲が良くない関係について、それほどレーガンを一方的に支持して、ヨーロッパを一方的に批判しようとは思いません。ヨーロッパにはやつぱりヨーロッパの立場がいろいろありまして、今のパイプラインの問題その他、主として経済問題に関しては、レーガンに一番近いはずの、あるいはレーガン以上にタカ派であるはずのイギリスのサッチャーまでが、レーガンに大変強く盾つたわけがあります。パイプラインの問題などでもレーガンがちよつと考え直してくれということに、一も二もなく「ノー、やります」という

ふうと言つたのは、ドイツと並んでイギリスのサッチャーでありまして、そういう態度を取るには取るだけの理由があります。したがつて、これはアメリカだけが非難さるべきでもなければ、ヨーロッパだけが非難さるべきでもない。誠に如何ともし難いような理由で、しかし、なかなかアメリカとヨーロッパの足並みがそろわない。ここが八〇年代の対ソ政策の難しさであります。もし経済、その他のそういう難しさがあるまま安全保障の面にも導入されて、このINFの問題についても、アメリカとヨーロッパの足並みがそろわないといふようなことになれば、これはもうやんぬるかなであります。けれども、幸いなことには、そういう可能性は今のところほぼ立ち消えになつたということでありませうから、目下のところ、ソ連は恐らく頭を抱えているのではないだろうかと言いたいわけがあります。

さてソ連が頭を抱えたらどうなるかという問題。これがまたなかなか難しいわけでありませう。私はしばらく前から、やがてソ連は頭を抱えたら、何か際立つた政策転換をするのではないかという、やや楽観的な見方をしてまいりました。厳しい見方をする人に言わせれば、ちよつとそこところは、先生、甘いんじゃないですか、というふうには批判したくなるんですけど、けれども、どうもいろいろ見てまいりますと、

いくらソ連だつて、そうそうカネのなる木をいくつも植えているわけではありませんから、経済のほうがそろそろ立ちいかなくなるのではないか。さつきブレジネフはラッキーだ、ツケの支払いはアンドロポフに任せて先に行っちゃったと言いましたけれども、そのツケの支払いプラス、ますますカネのかかるようなことをソ連はやっているわけでありませぬ。

軍事予算にしましても、今、日本とソ連はGNPが大体トントンです。そのほぼ等しいGNPの中から、ソ連は日本の十四倍ないし十五倍ぐらいの軍事予算を毎年使っています。これは一つには日本のほうが少なすぎるといふこともあるんですけども、その点を除いて言いますならば、とにかく二年、三年ではなくて、長年の間、ソ連は日本の十四倍も十五倍も軍事予算を使っているということであれば、そのうちにしわ寄せがどこかに表れるだろう。あるいはまたソ連は過去七、八年来、世界に大変大きな勢力範囲の拡張を行っています。アジアでもベトナム、これはもう今、ソ連と一心同体かどうかは知りませんが、少なくとも二心同体ぐらいには近寄っているわけでありませぬが、これも一九七五年、ベトナム戦争が終わってからそうなったわけですね。アフリカのアンゴラとかエチオピアその他も。

そういうふうに世界の各地にソ連の勢力が

大いに拡大されたら、そこだけ見てみますと、ソ連の大変な成果だということになりますけれども、その裏側を見てみますと、大変な経済的なしわ寄せがきているに違いない。ベトナム戦争の最中、アメリカはやたら正直に何でも発表する国ですから、そこまで発表しなくてもいいなど私どもも思つたのですけれども、ベトナム戦費に幾ら投じているというようなことを克明に発表する。一時の私の計算では、当時、できて間がない霞ヶ関ビル、今では珍しくなくなつてしまいましたけれども、高層建築の第一号で、それができて間もないころにベトナム戦争が始まつたわけですが、その霞ヶ関ビルがアメリカのベトナム戦費で、一日に、ちよつと大きく勘定すれば一つ、比較的内輪に見積れば四分の三できるといふぐらいのカネを使つていました。いくらアメリカだつて一日に霞ヶ関ビル一つ——これはそうそう長続きしないんじゃないかといふことを懸念したわけですが、けれども、果たしてそういう結果になつたことは申すまでもありません。

それくらいアメリカはベトナム戦争に大きなカネを使つたんですけれども、それでは今日、ソ連がベトナムにどれだけのカネを使つているかと申しますと、これはソ連はああいふ国ですからさつぱり発表いたしません。今、いろいろな国でソ連がそういうためにどれだけのお

カネを使つているかという金額の推計をやっていますけれども、なかなかこれはという線が出てきていません。あくまでも推測ですけれども、少なくとも名目的には、今日、ソ連がベトナムに対して使つておカネは、ベトナム戦争当時アメリカが使つていた戦費よりも上回つていてはないか。もちろん一方は六〇年代の話であり、一方は八〇年代の話ですから、おカネの価値は随分変わつていますから、したがつて名目と実質は大分違ひますけれども、名目的にはアメリカが当時、一日二百五十万ドルというふうに言われましたけれども、今日相当数の人が、ソ連はベトナムに一日三百万ドルぐらい使つていてはないかといふことを言います。真偽のほどは、重ねて申しますが、確かめるべきがありませんけれども、そういう説があるぐらいにソ連は膨大な額をベトナムにつき込んでいます。ベトナムだけではありません。キューバにもつき込んでいけばアフリカにもつき込んでいます。しかも七九年の末に、ソ連がアフガニスタンに攻め込んだときには、恐らく長くても、半年たてばソ連の軍勢力が物を言つて、アフガニスタンは静かになる。後はアフガニスタンの傀儡政権親ソ政権に任せて帰つてくればよろしいといふことでソ連は出掛けたはずですけれども、あにはからんや、その後、半年ではなくて、三年たつても今日さつぱり治

まる気配がない。大変な誤算であります。これも相当カネがかかっている。そういうふうには計算しますと、世界帝国のすそ野を広げたことは大いに目覚ましい成果かも知れませんが、実際にはそのためにソ連は随分経済のほうで重荷を負っているということになります。

更にもう一つ、深入りはいたしませんけれども、ソ連の経済問題にとつての大きなネックとして農業の問題があることは、諸君も大なり小なりご存じだろうと思います。ソ連にとつての農業問題、既に今年で連続五年間の不作と言われているけれども、連続五年間も不作ということはないわけですし、つまりこれが平年作だということでありませぬ。今から七年も八年も前に大変豊作であったというのは、これは何かの拍子にそういうラッキーな年があつたというだけのことでありまして、むしろ外国から毎年何千万トンも買わなければならぬような程度にしかソ連の農業はできないというのが現状であります。したがつてソ連は、この問題について大変頭を悩ませています。幸い、いま世界の穀物は余っていますから、ソ連は足りなければ三千万トン、四千万トン買うことができます。買うことはできますけれども、そのためのカネの準備があるわけでありまして、もちろんソ連のルーブルで買えるわけはありませんから、いわゆるハード・カレンシーを用意しな

ければいけない。経済がそれでも落ち込んでいけるソ連に、そうそうハード・カレンシーを容易に生み出す余地はありませんから、そこでちらほらそういう話が出ていますように、金(きん)を大量に放出する。ダイヤモンドを売るといふことで、穀物を買うハード・カレンシーを用意している。おかげで日本では、そのへのサラリーマンでもそう無理をしないで、少しぐらいなら金を買えると、こういうことになつてきていることは世間の常識でしかございません。

そういうふういろいろな考えてみますと、ソ連は経済的には相当追い詰められていますから、したがつて私は、ここらあたりでソ連がそろそろ方向転換をするのではないかなという期待を、実はまだまだ持つていられるわけでありませぬ。しかし反面では、確かにこの言い方は少し甘い言い方にすぎるともいひませぬ。といひますのは、ソ連はとにかく日本やアメリカと違つて民主主義とか世論がない国ですから、いくらでも無理がききます。それでなければ、モスクワの市民の生活がチェコのプラハの市民の生活よりも悪い、あるいはハンガリーのブタペストの市民の生活よりも悪い。今やっさもっさもつていますポーランドのワルシャワの市民の生活と比べても低いなんていうことに、どうして一体モスクワの市民なりソ連の国民は甘ん

じているか。どう考えても不思議なのですけれども、これは厳然たる事実でありまして、間違ひなくトラブルの最中にあるワルシャワの市民のほうが一 months たり、一年当たり、モスクワの市民よりもたくさん肉を食つていられる。これは間違いありません。しかし、それは人に言わせれば、なにも今日や昨日に始まつたことではなくて、昔からそうじゃないですかという。それは確かに戦前を見ても、東ヨーロッパのほうにソ連よりはだいぶ程度は高かつたわけですから、そういう戦前の状況がそのまま続いているのだと言へば、それはそれかも知れませぬ。けれども、それにしても支配されているものほのほうがいい生活をしていて、支配されているものほのほうが悪く生活をしていて、支配されているものほのほうがいい生活をしていて、支配されているものほのほうが悪く生活をしていて、というのですから、どうもどこか間違つていっているのです。しかしどこか間違つていっているのです。しかしどこか間違つていっているのです。ところがソ連のしづいとところですから、したがつて、そういう点をよく計算に入れて考えれば、ソ連が近い将来、方向転換をするだろうと考えられるのは、確かに甘きにすぎるともいひませぬ。しかし、いつかどこかでソ連は方向転換しな

ければならない。それで今、恐らく方向転換を
 そう簡単にするわけにはいかないし、しかし
 つまでもこの線で頑張ることもできないしと
 いうことで、たぶんクレムリンの指導者たちは
 大変頭を痛めているのではないか。しかし彼ら
 はまだまだ心のどこか一隅で、もうちょっと頑
 張ればアメリカとヨーロッパがまた割れてく
 るかもしれないというふうに期待しています。
 今のところはそれに期待をかける意味合いで、
 絶対に譲歩はしないという態度を取っていま
 して、このINFの問題につきましても、もし
 今年の末からアメリカの新型核ミサイル配備
 が始まったならば、ソ連はSS20をもっとたく
 さん作って、東ヨーロッパ諸国に配備をする。
 ジュネーブで行っている交渉も打ち切るかも
 しれない。ソ連は力には力でもって徹底的に対
 抗するという大変強い姿勢を示しています。そ
 うならないという保証はないんです。そういう
 意味では、アメリカが新型ミサイルの配備を始
 めるということが、必ずしもいい結果につな
 がるというふうに断定することは、私といえども
 できかねる話であります。

しかし、そうしなければもっと悪い時代が来
 ることだけは間違いない。そういう意味では、
 このNATOの決定を私は支持したいと思
 います。うまくいけば、そうすぐというわけには
 いきませんが、近い将来、それほど遠か

らざる将来、ソ連が少なくとももう一段妥協し
 た線で、もう一段譲歩した線での何らかの申し
 入れをしてくる可能性は、私はそれほど小さく
 ないと思うんです。なぜならば、アメリカも確
 かに苦しい。ヨーロッパも苦しい、日本も財政
 赤字だ、財政再建だ、行政改革だと、いろいろ
 言っています。決して楽ではありません。しか
 し比較すれば、ソ連のほうがもっと大変だろう
 と思います。特にアメリカの言うほどはやって
 いないかもしれませんが、西ヨーロッパ
 という同盟国もいれば日本という同盟国もい
 る。これは結構役に立っている。ソ連の同盟国
 はどうであるかといえば、足を引く張る同盟国
 ばかりで、ソ連の役に立っている同盟国などは
 オーバーではなくて一カ国もないわけであり
 ます。したがって、そういう東の体制と西の体
 制とを比べて考えますならば、やはり東の体制
 ソ連のほうがはるかに苦しいはずですから、今
 のところは強気でいろいろ言っていますけれど、
 ども、こちらさえ足並みをそろえて、いわゆる
 毅然たる態度を取り続けられれば、それほど遠から
 ざる将来、ソ連が折れてくる可能性は、私は決
 してなくはないと、こういう意味で少し将来に
 期待をつないでいます。

しかしまた、そのためにも一番必要なのは、
 最初から言っていますように、西側の足並みを
 そろえるということでありまして、もし西側の

足並みが少しでも乱れるというようなことにな
 れば、これはソ連のほうはまだまだ現在の線
 でやっていっていい結果が出るかもしれない
 と、そういう点に期待をつなぐ。一向に事態は
 解決しないということになりますから、西側の
 足並みを少なくとも最小限度そろえる、ここ
 のところが非常に重要なポイントではないかと
 思っています。

さて、もう少し日本を中心にした話をしたい
 と思いますが、我が国はソ連との関係を、一
 どうするか。中曽根内閣ができてから、韓
 国との関係を修復した、アメリカとの関係を修
 復した、東南アジア諸国へも行つて、なかなか
 いい成果を収めてきた。今度のウイリアムズバ
 ーグでもああいうことをやった。いろいろ外交
 的な成果は上がっているようでございますが、
 一番の難物であるソ連との関係については、今
 のところ、どうやってどう手を着けたらいいの
 か分からないという感じが強いわけでありま
 す。実は私も、かねてからソ連との関係を何と
 かしなければいけないということは、私なりの
 ペースで考えています。私自身もさつきソ連の
 大使館から革命記念日に招待が来るなどと言
 いましたけれども、そんなことはどうでもい
 いことです。ソ連の心ある人たちとなるべく本
 音の話をしたいということで、二十年ぐらい
 それなりの努力をしていました。つまり我々の

少数のグループでもって、ソ連の科学アカデミー——ソ連の科学アカデミーにはいろいろの研究所がありますけれども、政治、経済等々で一番に重要な力のある研究所は、知っている方もあるかもしれませんが、世界経済国際関係研究所という名前の研究所です。これは略語で言いますと、I M E M Oと言いまして、国際政治の、国際級の一流の学者でI M E M Oと言えは知らない人はない。もしI M E M Oと言っても何のことだか分からないようなのは、あんまりソ連のことを勉強していない人だと言っても決して言いすぎではないくらいに大変有名であります。それからナンバー・ツールの研究所が、アメリカ・カナダ研究所と言います。しばらく前まではアメリカ研究所と言っていましたけれども、やはりカナダを入れたほうがいいというようなことからして、数年前から、アメリカ・カナダ研究所という名前にしています。第三番目に、ファー・イースト、極東研究所というのがあり、更にそれと並んでやや似たような名前ですけれども、オリエンタル・インスティテュート、東洋学研究所というのもある。

そういうことですけれども、何といっても重要なのはさっきのI M E M Oであり、アメリカ・カナダ研究所なのです。このI M E M Oとアメリカ・カナダ研究所の所長をはじめとしたグループと我々のグループの間に、今年で十一

年目、一九七三年から一連のシンポジウムをずっと続けてきています。一番最近は去年の十二月に東京でやりまして、一回おきに日本でやったりソ連でやったりしていますから、今度は、たぶん来年の前半ぐらいにソ連でやるという段取りになるのだらうと思います。ちよつと余談ですが、ソ連との対話というのは大変難しいうございまして、とにかく面白くないことおびただしい。ですから毎回、一年半に一回ぐらい最近やっているんですけれども、一年半に一回やる前になりますと、よし、今度こそはというので大いにハッスルするのですが、終わりますと、私もそうですけれども、一様に皆、少しかつくりしまして、何かむなし、実りがありません。あという感じにおそわれるわけです。

というの、向うはとにかく少ないときでも六、七人、多いときには十数人出てくるのです。そしてそれなりに個人的な友人関係もできてはいるのですけれども、こと議論ということになりますと、一人いたって五人いたって十人いたってあまり変わりがないわけです。本当は所長だけ来てくれればそれで話は済んじゃうわけです、ある重要な問題については所長が何か言えば、たいてい後の人はそのバリエーションで何かを言うだけでありまして、今の所長の意見には異議があるなどということはない、どうころんでも言いはしない。しかもそれ所長の意見

というのは、我々に大体見当が付くような話ばかりだということになりますと、誠にもってこんな議論をいつまで積み重ねていったって、あまり意味はないのではないかと。うっかりすればレフチェンコ某などということでもって疑いをかけられたら損だと——そんなことはありませんが、そういうような意見さえたまに出るくらいに、普通の我々の感覚で言いますと、ソ連との対話というのは、何か実りがありません。——しかし、どうも実りがありませんから、ここで止めるのは簡単です。むしろおカネがからなくて助かるわけです。我々、政府その他から援助をもらってやっているわけではありませんから、むしろそういう意味では助かるのですけれども、かくなる上は簡単に止めるわけにはいけません。もし我々のほうから、日ソ・シンポジウムを止めましょうというようなことを言ったならば、ソ連のほうからそれを材料にして、日本にとつてはマイナスになるようなことをいろいろ言われるに違いない。また現に、ともかくにもそういう断続的ながらコンスタントな会議を開いている、そういうチャンネルがあるということは、いざというときに何かを聞く、何かを伝えるという意味はあるわけですから、これ、もう止めるに止められないのです。けれども、本当を言いますと、大変生産性の低い、あまりコスト・エフェクティブではな

い会議なのです。しかしそういう会議ではありますけれども、我慢してとにかく続けようではないかということをやっています。

そういったことを通じて、生産性は低いのですけれども、我々もなるほどと思うような収穫は随分あります。とにかく最初は一九七三年に日本へ呼んで開いたわけですけども、そのときは我々も一緒にホテルへ泊まり込みまして、夜、私の部屋へ一杯飲みに来てと言っても決して来ない。やいのやいの言いますと、それではというんで二、三人で来ました。つまり一人で行って、神谷の所で一時間しゃべっていたということになりまして、あいつは何を言ったかというところで疑いをかけられてはいけないと、どうもそれが心配らしくて、やいのやいの言いましたら、それではというんで二人で来る、三人で来るという状況から始まりまして。しかし最近では、こちらが黙っていますと、一杯やろうじゃないかというので向うから押しかけてくるようになりまして、それだけでも大変な違い。もう二人で来るとは言わなくなりまして、京都でやれば、それこそどこかにぎやかな所へ飲みに出ようなどということを暗に要求するような、そういうところまで先方は墮落してまいりました(笑)。だからといってガードは固いんですけれども、まあまあそういうところまでどうにかかいていきますから、したがってある程度

の言外の意味するもの、言外に意味されているようなものは、見当が付くようになっていきます。

一例を挙げれば、我々はいつもある大きなテーマとしては、「アジアの平和」というテーマでやっているわけです。それを過去七回やりました。「アジアの平和」というテーマですから、したがって朝鮮半島の問題なども必ず一つの議題にのせるわけですけども、ここ数年来、ソ連は朝鮮問題というのは大変不熱心でありまして、「そんなもの一つ議題として独立に掲げる必要はないではないですか」というようなことを言う。しかしこちらが頑張って、「いや、やっぱり朝鮮半島の問題は重要だから、たとえ一時間でも二時間でもやりましょう」と言うと、何のかんの言って朝鮮半島の問題を議論しないわけでありまして。ということは、我々、言外の意味をくみ取れば、要するに朝鮮半島の問題というものは、当分の間、現状維持でいこうということ。しかしソ連は表だって現状維持でいこうというふうには言えません。北朝鮮の立場を支持するという、そういう建て前をいつも取らなければいけませんから、したがって何か言わされるとすれば、それを言わなければいけない。しかしその建て前は実はもう繰り返したくない。さりとて現状維持で結構ですと言うことはできませんから、そこで朝鮮半島の問題は、こちらがいくらかよっかいを出しても何も返事

がないという状態が三年ばかり続いていきます。ですから朝鮮半島の問題は、当分の間めったに動かない、安泰である。なぜならばソ連も中国も朝鮮半島の現状維持で結構だという態度を暗にとっているわけです。その点では、朝鮮半島は一見不安定のように見えて、実はそれほど不安定ではないというふうに見えて、実はそれほどです。そういう幾つかの言外の意味を読み取る。そのところを頭を働かせれば、ソ連についていろいろ我々が察知できるようなものがあります。しかし今のところは、それではこのINFの問題とか、あるいは日本にとつての非常に大きな問題である北方領土の問題なんかについて、ソ連に近い将来動く意思があるかということになりますと、このへんは非常に微妙であります。しかし、私は可能性なきにせぬとあらざと思っています。

北方領土の問題は、そんなに簡単に先方が妥協してくると、私は思っていますけれども、それでも一昨年だっと思いましたが、そういう関係のあるソ連のある人が、正式の議題を議論しているときにはそんなことを言いませんけれども、コーヒー・ブレイクのときに何かの拍子に、「東アジアで今世紀中には解決できない問題が二つあると思うがどうか」と言いました。「それは何だ」と言いましたら、「一つは南北朝鮮の再統一の問題である。もう一つは北方領

土返還の問題である。この二つは今世紀中には解決できない問題だと思ふがどうか」というふうに言つてまいりまして、私も実は残念ながらそう思う。これは先方に口を合わせたのではなくて、私も本当にそう思つています。北方領土の問題は、今後とも我々はソ連に対して繰り返し主張すべきではありませんけれども、今世紀中に解決するというほど、近い将来における解決を期待することは、残念ながら、どうも国際環境からして無理ではないかと思つています。

私も誠に残念だけれども、あなたの意見に賛成だといふふうに言いましたが、ということはいぶ遠い先のことですけれども、条件が変わつてくれば、国際環境が変わつてくれば、北方領土の問題だつて十分考え直す意思はあるといふことを言つてゐるわけです。そうでなければ今世紀中は駄目だなどという必要はないので、未来永劫に駄目だとか、あるいはソ連はそんな問題はないと言つてゐるのですから、そんな問題はなと言つてゐる公式の席上での立場を、そのまま黙つてほうっておけばいいわけです。わざわざ今世紀中は解決しない問題の二つのうちの一つに挙げてくるところが、実はその程度の柔軟性は当方も持つてゐるのだから、もう少し日本も考えてくれないかということを書いてゐるわけです。このへんは大変難しい、しかし腰を据えてやれば大変興味のある知的な

ゲームでありまして、にもかかわらず、あまり足取りがはかばかしくないものですから、終わった後はなんかむなしくなる。ソ連と会議するのはもうこりこりだ、苦勞してまたモスクワまで行くのはいやだという気持ちになるわけでありまして、ましかときその程度のことを考へますと、ましかときその程度のことを言つて気を引かなければ会議に出てこないからと思つて、そこまで読んで言つたのではないと思ひます。

そういうことで、ときどきはつとするような場面もある。しかし、いずれにしてもそういう過去十年余りのソ連とのかなりつつ込んだやりとりからしまして、一つかねがね考え、感じてゐますことは、我が国がいかにソ連に対していわゆるバーゲニング・パワーがないかということ。もうちよつと我が国にバーゲニング・パワーがあれば——取引力、交渉力、あるいは外交能力と言つてもいいと思ひます——我が国にソ連に対する外交能力がもう少し備わつていけば、対ソ関係の改善というのは、何か日本で打つ手がもう少しあると思ひますけれども、どうも打つ手がない。アメリカはどうかといへば、これは言うまでもなくソ連に対して大変なバーゲニング・パワーを持つてゐまして、軍勢力にしろ、経済力にしろ、あるいはテクノロジの力にしろ、ソ連はアメリカに三目も四目も

置いてゐます。アメリカがソ連によって一番尊敬されている、一番恐れられてゐる国であることは、だれも疑いを持たないところだと言つていいと思ひます。西ヨーロッパの国々でさえも、ソ連からは一目、二目置かれてゐる。それだけ西ヨーロッパはソ連に対してバーゲニング・パワーを持つてゐるわけでありまして。

どういふ点で西ヨーロッパがソ連に対してそういう力を持つてゐるかと言へば、つまりは西ヨーロッパは東ヨーロッパの国に対してしよつちゆう影響を与えてゐます。その影響が一定以上になりますと、東ヨーロッパの国はがたがた、足もとがふらふらしてくるわけでありまして、せめてもう少し自由が欲しいといふようなことを考へだす。しかし東ヨーロッパの国が、せめてもう少し自由が欲しいなどということを書いていけば、ソ連にとつては命取りになる恐れがありますから、ソ連はそれはたたくつづす。そういうわけで一九五六年のハンガリー動乱、一九六八年のチェコの事件、そして今日進行中のポーランドの事件も、性質的には全く同じであると言つていいと思ひます。そういうふうには東ヨーロッパの国々が西ヨーロッパからの影響を受けて、経済的、政治的、イデオロギー的、そしてより多くの自由を求めるとか、その他がたがたするといふことは、ソ連の立場から見れば、ソ連帝国の基礎が崩れるといふことですか

ら放置できない。見逃すことはできない。抑えなければいけない。ことほどきように、西ヨーロッパは東ヨーロッパに対して、かなり根本的な影響を陰に陽に与える力を持っている立場にあります。したがってソ連の立場から言えば、西ヨーロッパというのはその存在自体が大変大きな潜在的脅威でありまして、そういう西ヨーロッパの潜在的な脅威に対して、ソ連はしょっちゅう一目、二目置いて気を遣っていないければいけないという立場にあります。

しかし残念ながら、日本にそういうソ連に一目、二目置かせるような力が備わっているかと言えば、備わっていません。確かにソ連は日本の経済力に期待をしています。日本のテクノロジの力にもある種の期待をかけています。しかし日本の経済力とか技術の力というのは、ソ連から言えば、もし日本がそれを提供してくれれば大変有り難い、もっけの幸いだ。しかし、もしそれを日本が提供してくれなくても、だからソ連が食えなくなるということではない。あつたほうがいけれども、なければ困るというほどのものではありませんから、要するに日本はソ連に対して何か力を持っているとしても、たかだかその程度です。ということは、おしなべて申しますと、日本はソ連にとつて大変無害な隣人であるということになる。戦後、日本の甘ったれた平和礼賛の考え方からすれば、日本

がソ連の無害な隣人であるということは、だから日本はソ連の敵意をかきたてることはないから、日ソ関係がますます友好になる基礎がそこにあるんだということになりますけれども、決してそういうものではないのでありまして、無害な隣人などというものは、大体相手から軽んじられるだけ。なめられるというような言葉を使いますと、少しどぎつくなりますけれども、ありていに言えばそういうことであります。

現にブレジネフが死んだ葬式には、我が国からは内閣総理大臣鈴木善幸自ら行っているわけです。そして「せつかく葬式に行ったのだから、アンドロポフさん、ついでに一回会いましょう」と申し入れたのですけれども、アンドロポフのほうからは「ニエツト」と、お断りいたします。今、間に合っていますということ、門前払いをくいました。しかし会うべき人には、アンドロポフはその葬式の忙しい間にもちゃんと会っています。アメリカのブッシュ副大統領、それから西ドイツの大統領のカルスデンス、それからインドの首相のガンジー、パキスタンのハク大統領、それからアフガニスタンの革命評議会議長のカルマル、この五人にはアンドロポフはちゃんと会っているわけです。鈴木さんには会わないというところからソ連の考えていることが非常によく読み取られるわけであります。要するにソ連が、アンドロポフがなぜその

五人に会ったかと言えば、インドとパキスタンとアフガニスタンというのは、ソ連はアフガニスタンの問題を何とかして政治的な妥協でもって解決したくてしょうがない、持て余しているということの証拠です。ついでには、ということではアフガニスタン問題の解決に一番関係のあるアフガニスタンとパキスタンとインドの代表には会ったということでありまして。あとアメリカとドイツに会ったというのは、正にアメリカと、それからドイツはイコール西ヨーロッパということとして、やはりアメリカと西ヨーロッパには一目、二目、三目、四目置いている。そういうところはどんなに忙しくても、申し入れがあつた以上は会わなければいけない。しかし、鈴木さんなどに会つたつて全然意味はない。「ニエツト」と言えば、日本は怒るかもしれないけれども、日本が怒つたつて、ソ連にとつてみれば別に痛くもかゆくもないのです。ですから「さよなら」という。

そういうふうには、ソ連の日本を重く見ていないというところは、実は非常にはつきりしているわけであつて、こういう弱い立場からいくらソ連に対して大きなことを言つたつて、力の原理からいつて通用するはずがないのです。ですから日本が対ソ政策の上で効果的なことをやろうと思えば、日本はそういうわけで強い力が無い、ということになれば、まずすべきことは、

やはり強い力を持っているところとなるべくスクラムを組んでやるという姿勢が必要であります。ということは、つまりアメリカやヨーロッパと足並みをそろえ、スクラムを組んで一緒にやって対ソ政策をやっていく。これではければ日本は対ソ政策でもって、何のプラスも実現することができないというふうに私は思っています。そういうふうに考えますにつけても、今度のウイリアムズバーグのサミットで、日本がアメリカやヨーロッパと、差し当たってヨーロッパINFFの問題について一緒にやりましょうという態度を示したのは、これは大変良かった。それを通じて、つまりソ連に対して、わが国の対ソ政策はバーゲニング・パワーを持っていない日本が独りぼっちでやるのではなくて、ソ連に対してもっと発言能力を持っているアメリカや西ヨーロッパと一緒にやるんですよということを言っているわけでありますから、この姿勢は崩してはならないと、こういうふうに思うわけがあります。

いろいろ言ってます。それから主にソ連を中心とした問題がいろいろありましたために、それ以外の問題に今晚はあまり触れることもできませんでしたが、要するに我が国の外交というのは、今まで申し上げてきたような意味で、一つの正念場に立っています。しかし幸いなことには、いろいろでござい

ますけれども、大づかみに言いますならば、アメリカにしろ西ヨーロッパにしろ日本にしろ、タカだ、保守だというふうにいるいろいろ言われていますけれども、そのタカ派四人組を中心とした勢力が対ソ政策で考えていることは、究極的には、八〇年代における新しい対ソ妥協、新しい対ソ合意をいかにしてつくるかというおせん立て、その前提条件としての防衛努力の増強ということをやっているわけであり、防衛努力の増強のほうをやらないうちに、こちらのほうの新しい合意を模索するといっても、できない相談であります。したがってそのところを、関係を見抜けないままに防衛努力を増やすというところだけ批判をしてみても本当の批判にはならない。むしろそれを通じて新しい対ソ合意の道が開けてくるのではないだろうか、このように私は考えているわけであり

ます。
長時間、ご清聴をいただきましてありがとうございます。
ございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。